

29 大内政弘

大乱を動かし、 天下静謐を願う

1446~1495

官位 従四位上 贈従三位 左京大夫

菩提寺 法泉寺（廃寺）

墓所 法泉寺跡付近（上宇野令）

応仁の乱参陣

伊予国での戦いの陣中で大内教弘が病死した後、家督を継いだ息子政弘も引き続き河野氏を支援し、幕府方の細川軍を撃退、幕府の討伐対象となります。その後政弘の赦免を画策した義政側近伊勢貞親らが失脚。

將軍家や畠山氏・斯波氏の家督争い、幕府内での主導権争いなどに端を発し、細川勝元率いる東軍と山名宗全率いる西軍が京都市街で戦争を展開、応仁の乱が始まりました。將軍を擁し幕府軍となった東軍が優勢でしたが、宗全（政弘母の養父）の要請に応じた政弘が、

河野通春軍や瀬戸内海賊衆、九州勢を含む二千艘の船、数万の大軍を率いて上洛すると、西軍は攻勢に転じました。政弘は東寺から船岡山、相国寺へと陣を移し、主力部隊として活躍します。

市街戦が展開され、祇園社など多くの寺社が焼失しました。激戦となった相国寺の合戦では陶弘房が討死

しています（菩提寺・瑠璃光寺）。西軍は足利義視を將軍に擁立、東西2つの幕府、2人の將軍のもとで戦乱は長期化しました。



西軍の陣がおかれた西陣（京都市）



相国寺（京都市）



大内政弘画像（龍福寺蔵）

ら大内氏当主と認められると東軍方として赤間関で挙兵、大内家の家督をめぐる抗争が展開しました。筑前国守護代仁保盛安が従い、道頓の子嘉々丸（政弘の養子）に守護職が安堵されず。京都周辺の大内勢にも動揺が起こり、有力親族の大内武治、仁保弘有ら有力家臣の多くが東軍に転じ、西軍を悩ませました。

家臣団筆頭の陶弘護も一時東軍に加わりませんが、当座の計略だったようで、政弘方に転じて道頓を攻め、長門国賀年城（阿東嘉年）を包囲した道頓軍を破り、防長両国を制圧、道頓は豊前に追われます。弘護とともに政弘の母（妙喜寺殿）もまた、政弘留守中の領国の危機への対処に大きな役割を果たしました。乱終結後、弘護が大内館で石見の吉見信頼に殺害されるという事件が起こります。

乱収束と山口への帰国

政弘は当代屈指の武家文人といわれました。応仁の乱での長期在京中、首都京都荒廃の一因となる一方で、合間に多くの公家・文化人と交わっており、培われた人脈や文化的素養は帰国後、領国の政治や文化振興に活かされました。貴重な古典書籍しやうしやう鬼集も盛んに行っています。

戦乱の長期化に伴い厭戦気分が広がるなか、勝元と瀬戸内海の制海権をめぐる対立する政弘は和睦に消極的だったようです。朝倉孝景の東軍への寝返り、兵糧補給路の寸断等により東軍優勢のもと、両軍大将宗全・勝元は相次いで死去、山名氏降伏後も畠山義就と政弘らは抗戦を続けました。

終戦の鍵を握る政弘に対し、義政は東西両軍の和平を図らせませず。義政正室日野富子の仲介のもと、領国が気がかりな政弘と義政との講和交渉が進められました。政弘の手元に留め置かれていた、幕府遣明船の唐荷引き渡ししが政弘赦免の条件だっ

道頓挙兵と大内家の分裂

東軍は大内領国を攪乱するため大友氏・少弐氏らを蜂起させ大内勢は九州から追われ、国元で留守を支えていた伯父道頓（教幸）は、將軍義政か

たようで、義政へ納められると、政弘は4カ国守護職安堵などの厚遇をえて東軍に降伏、周防に帰国しました。日本史上大きな転換点となった大乱は、政弘の帰国によって終息を迎えました。

翌年政弘は九州へ出陣、関係改善を図った石見・安芸の国人層も従えた軍勢により少弐氏を破り、留守中に失った豊前・筑前を回復しました。

父の名誉回復と、自身の家督の正統性を示すため、亡父教弘の贈位運動を展開します。応仁の乱終結における功績も評価され、教弘に破格の従三位が与えられました。



菩提寺法泉寺のシンパク (滝町)

大内氏当主の多くは戦場で命を落としており、政弘は例外的に山口で、病によって亡くなります。



大内政弘の墓 (上宇野令)

雪舟と妙喜寺庭園

京都から山口へ下向した文化人のひとりとして、画僧雪舟がいました。大内氏が応仁の乱勃発と同時期に出した遣明船に乗って、中国へ渡りました。中国帰りの雪舟は、大内氏の誇る中国画の莫大なコレクションにも触れ、中国の画家の作風を描きわける技術を身につけます。

常栄寺雪舟庭は、かつて政弘の母の菩提寺・妙喜寺みょうきがあった地で、そこに雪舟がつくった庭園と伝えられています。

本堂の前には枯山水、北側には池泉庭が広がり、奥には地形を生かした豪快な石組で滝を表現した龍門瀑りゅうもんぼくがあります。石の鋭い斜線によって構成された枯山水には、雪舟の山水画から受ける印象に似た躍動感が感じられます。



雪舟のアトリエ跡・雲谷庵 (天花・山口観光コンベンション協会所蔵)



常栄寺雪舟庭 (宮野下・山口観光コンベンション協会所蔵)

1465	父教弘、興居島で病死
1467	応仁の乱勃発 上洛し西軍として参戦 雪舟、大内船で中国へ
1469	石城神社 (光市) 本殿造営と伝わる
1470	伯父道頓、赤間関で挙兵
1471	陶弘護、賀年城で道頓軍を破る
1473	山名宗全・細川勝元死去
1477	応仁の乱終息 京都から帰国
1478	豊前・筑前を平定
1479	三条公敦、山口下向
1480	宗祇、山口下向
1486	教弘に従三位が贈られる 興隆寺が勅願寺となる 雪舟、山水長巻制作
1489	銀閣造営
1490	足利義政死去、義材が將軍となる 猪苗代兼載、山口下向
1493	明応の政変
1495	山口で病死 (50 歳) 新撰菟玖波集完成

赤間関の犬の渡し賃

応仁の乱が勃発し山口・防府間の往来が増加したとみられ、政弘は鯖河 (佐波川) の渡しの舟賃などについて壁書で定めています。往来人は一瀬一文で、当時中洲があったため二文必要でした。洪水時も料金は変えられず、風雨の時や夜中でも、舟賃が支払われれば舟を渡さなければなりません。乱終結後、赤間関 (下関) の渡し賃についての壁書では、人は下関から小倉まで三文、馬や輿こしは十五文、佐波川の規定にはなかった条項として「いぬ一ひき 十文」とあります。